

平成27年度「不登校に関する研修会」講義記録

第2回：平成27年9月3日（木）県立総合体育館

テーマ「子どもの育ちを考える～ネットワークによる環境への働きかけ～」

講師：野尻 紀恵（日本福祉大学 准教授）

初めに…

日本の先生は、まる抱えだと言われている。今までは、先生たちの努力でなんとかなってきた。しかし、最近は問題が複合化し、やりにくくなった。先生たちだけの努力では、難しい。

1 ふくしって？

(1) 福祉が大切にしていること

“人が持っている価値観や意味付けを、決して否定しない。それを大切にしながら、支援をさせていただく。”ということ。教育も福祉も似ている。

だめだと言わないで、子どもたちをそのまま見ていくことが大切ではないか。

(2) 「ふ」だんの「く」らしの「し」あわせ で、「ふくし」と伝えている。

将来にわたって、自己実現ができる力をつけていくことが大事。大人は、自分で自己実現しているが、子どもたちは、支援を必要としている。子どもたちは、どんな自己実現をしたいと思っているのかを探ることが大事である。

2 現代の子育ての現状

(1) 子育ての孤立化

子どもを標準化している。まちがいなく、失敗なく、ちゃんと育てなきゃという意識が高い。結果、子育て雑誌に頼ることに。

(2) 子育ての不安

子どもの失敗を許さない。社会が子どもへの寛容さを失っている。その関係性を、子どもたちが一旦切ることがある。それが、不登校となることもあるのでは。

例：無縁社会とボランティア

専門職だけでは、フォローしきれない。ゴミ屋敷を例にとると…。

① 行政に苦情が行く。→専門職が片づける→社会的排除

（精神障害や、虐待にもあてはまる。地域で、排除されていく。こそこそ言われる。）

② ボランティアが片づける。→社会的包摂

（地域で包み込んでいく。居場所や社会支援の場を、正規の場でなくても活用していく。）

3 子どもの貧困対策推進法（2013年6月）、子どもの貧困対策に関する大綱について（2014年8月） 「学校」をプラットフォームとした総合的な子どもの貧困対策の展開

学校教育による学力保障、学校を窓口とした福祉関連機関等との連携、地域による学習支援など。大阪市では、塾の先生がしている。しだいに生活保護家庭の子は来なくなる。『努力を喜んでくれる人がいないのだから、努力しない』いろんな人が関わることで、子どもはその気になっていくもの。

4 子どもの貧困とは

- 日本の子どもの貧困率 15.7%→6人に1人が貧困。年収二百万円台くらい。月収十二万円ぐらゐの家庭もある。衣と住でやっど。一切出かけない→人と切れていく。
- 貧困の連鎖
貧困により、子どもでも人とのつながりが切れていく。→夢を持たなくなる。パワーを落とす。外にも出ない。自分はどうでもいい。
こんな子を、迎えに行くだけでは無理。

5 困った子は、困っている子

- 表面化する行動の背景に問題がある
何が悪いのかという原因探しばかりではいけない。背景を捉えながら、何が使えるのかを探る。きっかけとなる出来事はあると思うが、それだけが原因となっているのではない。
裏側の問題を、できるだけ集める。子どもの情報は、地域よりも、学校の方が集まっている。

6 環境に働きかける

- 従来のアプローチでは、問題に焦点をあて、難しい面から見ていた。
- 環境に働きかけるアプローチでは、情報を集め、子どもを多面的に捉えていく。問題行動を問題として捉えるのではなく、行動の背景にあることが問題だと考える。
「この人が抱えている関係性の中で、一番改善しやすい所（つながりやすい所）は、どこだろう？」
- 証拠に基づくアプローチ理論
人は環境の中で作用し合っているんで、一つの環境が変わると他の多くの作用が変わりシステムが変わる。→地域のどこかに頼み、親と子の関係が変わる。
- エンパワメントアプローチ理論
関係性がより一層強くなるように支援していく。
例：学校からの手紙は、誰が持って行って欲しいの？とか、子どもがどのように関わって欲しいと考えているのかを探る。